

草戸千軒発掘秘話② 洪水の後 一始まりは現場復旧、そして魚取り一

草戸千軒町遺跡は、芦田川の中州となっていたため、「水」との付き合いに注意を払ってきました。調査への影響をより少なくするためです。しかし、梅雨の時期や台風の来襲など、川の増水による遺跡の水没は避けることができません。その際は、川の水が引いた後、ただただ調査区の復旧に励むしかありません。

調査区が水没しプールと化した後、まず排水作業から始めます。排水管が3インチや4インチのエンジン・ポンプを5～6台並べて終日動かし、2～3日後にようやく調査区の地面が姿を現します。そして、溜まっていたのは水だけではありません。川の濁流は、土砂をも運んでいました。この新たに堆積した土砂を取り除いて、やっと調査の再開に至るのです。

この復旧作業、調査区と川の間の手が決壊した時には、土手の土が調査区に流れ込み、その除去と土手の補修ということで、さらに時間がかかります。そして、時には予想もしなかった「滞在者」に出会ったこともありました。それは、昭和61年（1986）5月のことです。いつものように、エンジン・ポンプで排水を行い、調査区内の水位が徐々に下がる中で、そこに確認されたのは泳ぎ回る大量の魚の群れ。魚たちも、濁流の中で安息の地を求めて、土手が決壊した調査区の中に身を寄せていたのでしょう。

しかし、いつまでも水を置いておく訳にはいかず、魚は川へ戻すことにしました。この作業の中心となったのが〇調査員、網での魚取りに励みました。とはいえ、魚は泥水の中で跳ねます。その泥水を浴び、全身が汚れながらの作業です。網ですくった魚はコンテナへ移します。何度も繰り返してコンテナが一杯になると、これを川へ放ちます。そして、5日間ほど続けて、調査区から川への「放流」は完了しました。

この時の大量の魚、中には鯉もいましたが、多くが鮎で30cmを超えるものも相当数いました。数えた訳ではありませんが、数千匹を超えて、万に及んでいたかも知れません。そして、網での魚取り、コンテナ運びは思いのほか重労働で、〇調査員は疲労性の腰痛に見まわれることになりました。

調査区の水没は、中州に立地した遺跡ゆえに避けて通ることはできませんでした。土砂が堆積した調査区を見ては嘆息するしかないのですが、復旧が進み、水没以前の状態に戻ると一種の感動を覚えたものでした。

そして、「放流」の中心となった〇調査員、周りでは「鮎の恩返し」がきっとあるよと称えていたのですが、「恩返しが腰痛か」と、その時は嘆いていました。しかし、今では時々「放流」を懐かしく語っています。ただ、「恩返し」に見合うようなことがあったかは、周りでは分かりません。

（主任学芸員 下津間 康夫）



洪水の後、復旧作業の開始
昭和61年5月